いろはすの単発短編集

こころのつき

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りいろはすの短編集となる予定。

いろはすの話が少ないので少しでも増やそうと思って書いています。

この作品はｐｉｘｉｖにも投稿しています。

目次

うぶはす、初めての恋煩い（1）―― 1
うぶはす、初めての恋煩い（2）―― 6
うぶはす、初めての恋煩い（3）―― 12
うぶはす、初めての恋煩い（4）―― 20
一色いろはが嫉妬するようです（1）―― 26
一色いろはが嫉妬するようです（2）―― 36
一色いろはが嫉妬するようです（3）―― 42
一色いろはは甘えたがり（1）―― 47
一色いろはは甘えたがり（2）―― 53

うぶはす、初めての恋煩い（1）

最近わたしはおかしい。

わたしはせんぱいのことが好きです。このせんぱいとは葉山先輩のことではなく、比企谷八幡先輩のことです。割と最近になって気づきました。

そこまでは別にいいんです。おかしいのは、わたしがせんぱいのことが好きだと自覚してから、全然今までのように振舞えなくなったことです。

可愛く作ったわたしと言うか、せんぱいの言う〝あざとい〟わたしとして振舞えなくなりました。

せんぱい以外の前ではいつもどおりなんです。いえ、せんぱい以外の男子に話しかけられても邪険にして適当に流すようになったので、変わったと言えば変わりましたが。

でも、せんぱいに対しては自覚する前と後では会話そのものが難しくなったと言いますか……。

とにかく、せんぱいの前に立つと頭が真っ白になってしまうんです。

色々と考えてせんぱいに話しかけても、あの目つきの悪い顔を見ると全部吹っ飛んで、言葉は噛みまくり、話は支離滅裂、とせんぱいのことが好きなわたしとしては大問題です。

せんぱいが好きだと自覚してから、せんぱいの言う黒歴史?が随分と増えました。

せんぱいと顔を合わせた日の夜は毎日ベッドの上で悶えてます。あの時はこう言えば良かった、なんであそこで噛んじゃうの、絶対せんぱいに変な子だと思われてる、ｅｔｃ．ｅｔｃ……。

最近そんな感じでしたので、今日こそは挽回しようと思います。

とりあえず、話しかけるのにまず〝せーんぱい〟と声をかけて、そしてこれから何するか聞いて……。

最終的に休日の予定を聞いてデートに誘えればミッションコンプリートです。

よし、じゃあおさらい。
〝せーんぱい〟〝何してるんですか？〟〝ところで今週の土日は空いてますか？〟
うん、完璧ですね。
さて、じゃあせんぱいはそろそろ奉仕部の部室へ向かうので、偶然会った振りをして……なんて考えていると背後から肩を叩かれました。
「おう、一色。　生徒会か？」
――振り返ったところにいたのはせんぱいでした。
もちろん、さっきまで考えていた諸々のシミュレーションは綺麗さっぱり吹き飛んで頭の中は真っ白です。
「せせせせせ、せんぱい！　え、えーと……きょ、今日はいい天気ですね！」
わたしのバカ！　もうちょっと良い話題があるはずです！というか、外は晴れでもなんでもなく、むしろ今にも雨が降りそうな曇天なのに……。
「曇りをいい天気とはなかなか良いセンスだな、一色。ってか、なんでそんな驚いてんだ？」
「えーと、そ、その……せ、せんぱいのせいです！」
「はぁ？　俺、一色になんかしたか？」
「せ、せんぱいのことを考えてるときに声をかけてきたから、思わずドキッとして話しかける内容を全部忘れちゃったんですよ！」
「それ、どう考えても俺のせいじゃないよね、一色……。つーか何考えてたんだ？」
「え？　あー、えっとせんぱいともっとちゃんと話せるようになるにはどうすればいいかって……」
あれ？今わたしが言ったのってちょっときわどくない？具体的にはせんぱいにわたしの想いがバレそうって意味で。と、とにかく言い訳しないと。
「ちちち、違いますからね！　せ、せんぱいともっと話したいって言うのは、その……そう！　どうすればもっとせんぱいに仕事を手伝って

貰えるかってことですから！」
「そんな食い気味に否定されるとそこはかとなく悲しい気分になるな。……なんだ、生徒会の仕事は多いのか？」
うー、せんぱいに申し訳ないです。
そんなに強く否定しなくても良かったのに。
というか自分でもバレバレだと思うような対応してるのに、気づかないんですかね、この人は。
「……し、仕事はまぁまぁ多い方ですかね？」
実際はそんなに多いわけじゃないですけど、さっきの言い訳の手前、少ないと言ったらおかしいですよね。
「ふーん、そうか。　……大変なら手伝った方がいいか？」
「……ふぇ？」
「あざといな、おい。　いや、最近全然生徒会の手伝いに呼ばれないから心配でな。　仕事が多いなら手伝った方がいいだろ」
せんぱいの目にどこか気遣わしげな光が宿る。
心配してもらえて嬉しいですし、その優しそうな目は好きなんですけど、それを向けられるとちょっと、その……。
「だだだ、だひじょぶです！　しぇんぱいも奉仕部ぎゃんばってください！」
体がかあっと燃えるように熱くなって、柄にもなく焦ります。
どもった上に言葉も噛み噛みで恥ずかしくなったわたしは、それはもう風のように走り去ったのだった。
今度こそわたしのバーカ！　せっかくせんぱいから手伝ってくれると言ってたのに、どうして断っちゃったんですか、もう！
しかも、デートの約束なんて話題にも出てきませんでしたし！
……まぁ、この状態でデートしてもどうにもならない気がするので、ある意味結果オーライですけど。

うん、せんぱいのことを好きだと自覚してからずっと思ってましたが、今までわたしが恋だと思っていたものは、どうやら恋ではなかったようです。

だってこんな暴走気味で、わたしを悶えさせてばかりの感情なんて今まで経験したこともないです。
どうやらわたしの初恋はせんぱいで、自覚してからこっち、わたしはその初恋に振り回されてばかり。
さっきみたいなやり取りなんて、今時小学生でもやらないような、恋の駆け引きと言うにはあまりにも拙いものでした。
初恋は叶わないなんていいますけど、それも道理ですね。
こんなわけの分からない感情、初めてなら持て余して当然です。こんなまともに会話もできないような状態で、相手に好きになってもらうって、そんなの無理ですよ。
わたしのせんぱいへの初恋も、叶わないのかなぁ……。
それは、嫌だな……。
最近、せんぱいとのやり取りを思い出して悶えた後には、いつもこの思考へとたどり着きます。
そうすると、決まってきゅっと胸が苦しくなり、どうすればせんぱいに想いが届くのか考えてしまいます。
でも、幾ら探したって明るい材料は見つかりません。
当然ですよね。
せんぱいには奉仕部の二人がいます。わたしよりずっと素敵で付き合いも長いお二人が。
あの二人にはきっと敵いません。あの捻くれたせんぱいが〝本物〟を求めた二人です。わたしが万全であっても難しいと思います。
増してや、今のわたしはだめだめです。
初めての恋に振り回されて、会話一つ満足にこなせず、最近ではこのまま嫌われるんじゃないかと怖いです。
これじゃだめだと思って対策をたてても、せんぱいの前に立つと何もかも上手くいきません。
はぁ、こんなんじゃなかったはずなんですけどね。
「せんぱいのこと、すきなのに」
叶わない想いって、こんなに辛いものなんですね。
せんぱい、わたしに初めての恋を教えてくれてありがとうございま

す。
でも、どうせなら、こんな苦い初恋じゃなくて、もっと甘酸っぱい初恋が良かったです。
「あきらめたく、ないです」
せめて、せんぱいが誰かと付き合う前に、告白くらいはしたいな。
このままわたしの初恋が、何も形にならず終わるのは、いやだ。

うぶはす、初めての恋煩い（2）

最近、一色の様子がおかしい。
いつ話しかけても顔が真っ赤だし、今まで作ってたはずのあざとい振る舞いが全くない。
体調でも悪いのかと聞いてみても、余計顔が赤くなって、更に言葉も噛み噛みになってしまう。
いつもそうなので体調が悪いわけではないのだろうが、明らかにおかしい。
いや、もうぶっちゃけるが、様子がおかしいというか、めちゃくちゃ可愛い。
耳まで赤く染まった顔とか、慌てたような仕草とか、思わず勘違いしてしまいそうな言動とか、もう可愛すぎてやばい。
思わずこの間は〝天使かな？〟と呟いたら顔を真っ赤にして逃げられたし、コマチエル、トツカエルに続く第三の天使イロハエルとして俺の中で殿堂入りするまである。
というか、この三人の天使の中で唯一イロハエルだけは恋愛対象にしても問題ないので、血迷って告白して振られちゃうかもしれん。振られるのかよ。
とはいえ、一色は葉山のことが好きで、女子は恋することで可愛くなるとか言われてることも考えると、どうせ葉山のことでなんかあったんだろう。
天使を誑かすとは葉山許すまじ……と思ったが、イロハエルに嫌われるのも困るので、大したリアクションは起こさなかった。
強いて言うなら、海老名さんにとべはやの燃料を投下するという地味な嫌がらせくらいである。
まぁ、葉山を睨みつけてたせいではやはちの燃料も燃え上がったけどな！
さて、そういう風に自分には関係ないだろうと思っていたのであ

る。ついこの間までは。

その日は雨でベストプレイスが使えず、昼飯は教室で食うことになり、正直居づらかった。

そんな居づらい中で弁当を食い終わり、いつものように影を極限まで薄めていると、〝失礼しまーす〟とあざとい声が教室に響いた。

そのあざとい声の持ち主である一色は、真っ直ぐに葉山の元へ行くと、三浦のガードをすり抜けて葉山に話しかけた。

ところどころ聞こえてくる話し声によると、サッカー部を休ませて貰うとか何とか話しているようだった。

葉山に用件を伝え終わった一色は、ふと誰かを探すように視線を巡らせる。そこで、なんとなく一色を眺めていた俺と視線がかち合った。

俺と視線が合った一色の変化はあまりに顕著なものだった。

ボン！と音が聞こえてきそうなくらい一気に頬を紅潮させると、思いっきり首を捻って俺から視線を逸らす。

そのまま同じ側の手と足を同時に出しながら、絵に描いたようなぎこちない歩き方で教室を出て行こうとする。

しかし、そんな歩き方では上手く歩けないわけで、俺のちょうど真横あたりで躓いて転びそうになった。

そこで俺は横から腕をつかんで、転びそうになった一色を支えた。

すると一色は、今までの顔の赤さが何だったのかというくらい、耳まで顔を真っ赤にして、噛み噛みでどもりながら俺に礼を言うと、弾丸のような勢いで走り去った。

残ったのは呆然とした俺と、クラスの連中の沈黙だった。

一拍置いて、沈黙は二方向三種類の視線へと変わる。

一色の去った方向に対しては微笑ましそうな視線。

俺に対しては生暖かい視線と嫉妬と殺意のこもった熱い視線。

俺は自分に向けられる視線から身を隠すように、手元の小説へと目を向けたが、内容は全く頭に入ってこなかった。

一色は葉山に対しては今までと変わりなかった。多少素っ気無

かったかもしれないが、少なくとも大きな変化は無かったはずだ。
しかし、俺に対してだけは一色は顔を真っ赤にして緊張したように言葉に詰まる。
それは一体どういう理由があってのものだろうか。考えられるのはたった一つ。だからこそ、俺は二種類の視線による集中砲火を浴びているわけだ。
勘違いではないかと思うが、客観的に誰が見ても勘違いではないのを向けられた視線が断定している。
一色が、俺のことが好き……？
いや、そんな馬鹿な。
しかしそれ以外に考えられないし……。
そもそも一色が俺のことが好きだから何だって言うんだ。あぁ、いや大天使イロハエルですもんね、付き合ってくださいお願いします。
いやいや、しかし……。
そんな感じで混乱した俺は、次の授業が始まって平塚先生に殴られるまで、堂々巡りの思考を回していたのだった。

＊＊＊

「ふぅー、よし。今日こそ……」
わたしはせんぱいの教室の前でせんぱいを待ち伏せします。
別に大したことを頼むつもりはありません。ちょっと前まではよく頼んでいたように、生徒会の仕事の手伝いをお願いするだけです。
もっともその大した事じゃないことを頼もうとして、今まで何度も失敗してきたわたしにとってはかなりの緊張を強いられます。
うぅー、早く出てきてください、せんぱい。早く会いたいです。
あー、でもちょっと怖いので、前みたいに突然じゃなく心の準備をさせてください。
……出て来ました、せんぱいです。
近くに結衣先輩がいるってこともありません。絶好の機会です。
わたしはせんぱいに近づくと、一度きゅっと唇を引き結んでから声

をかけます。
今度こそ……。
「せ、せんぱい」
よ、よかった。少し出だしで躓きましたが、これくらいなら許容範囲内です。
せんぱいはわたしの声に反応して顔を上げました。視線が重なることで、顔が火照って赤くなるのが自分でもわかります。
「あー、一色か。　どうした？」
「そ、その！」
あ、やばい。声が上ずりました。で、でもまだ大丈夫です。ちゃんと用件を言えればいいんです。まだこれからです、落ち着いて……。
「その、きょ、今日は生徒会の仕事を、手伝ってくれませんか？」
詰まり気味ですが、何とか言えました……。安堵感がやばいですけど、まだ答えをもらってません。答えによっては更に問答を重ねることになります。
せんぱいは、少しだけ考え込んでから口を開きました。
うー、葉山先輩に告白したときより緊張するんですが……。
「あぁ、この前も大変って言ってたしな。……よし、構わんぞ。由比ヶ浜にメールするからちょっと待ってくれ」
「は、はい。どうぞ」
ふぃー、よかったです。前みたいに渋られてたら説得する自信はありませんでした。というか、よく前のわたしはあんな風にせんぱいに絡めましたね。
今のわたしには絶対に無理です。さっきの会話だけでいっぱいいっぱいですし、もう既に身体は緊張でカチコチです。
あぁ、でも久しぶりにちゃんとせんぱいと話せた気がします。これだけの会話でも嬉しいし幸せだな……。
「よし、メール送った。それじゃ行くぞ、一色」
「ひゃ、ひゃい！……そそそ、それでは行きましょう」
うぅ、わたしのバカ。せんぱいが目の前にいるのに浸ってるなんて。

絶対今ぎこちない歩き方ですよ。というか、きちんと意識を向けて手足を動かさないと歩けないって、わたしどれだけ緊張してるんですか……。

とにかく、今は転んだりしないように注意しないと。好きな人の前で転ぶとか、勘弁してください。スカートですから下着を見られますし……。

「ところで、一色」

「は、はい、なんですか？」

と、突然せんぱいに声をかけられましたけどなんとか対応しました。

よし、この調子で今日は……。

「生徒会室は、さっき過ぎたぞ」

「……ふぇ！」

何がこの調子ですか！もう、ほんとせんぱいの前だと失敗してばかりです。歩き方といい通り過ぎたことといい、絶対せんぱいに変な子だと思われました。

「す、すみません。ここですね、今開けます」ガチャ

はぁ……まぁ、今日せんぱいに生徒会の手伝いをお願いした時点で、黒歴史が増えることは諦めてます。大事なのは黒歴史を増やさないことではなく、せんぱいと一緒に時間を過ごすことです。

この際それ以上は望みません。まずはせんぱいと会話するのに慣れないとどうしようもないですからね。それに作ってしまう黒歴史以上に、せんぱいと一緒にいると嬉しいですし。あとで、ジタバタと悶えることになるのが玉に瑕ですけど。

「それでは、生徒会室にようこそ」

「おう、失礼します。……って誰もいないんだな」

「きょ、今日はわたし以外はみんなお休みです。わ、わたしの分の仕事はまだありますけど、それで残ってもらうのも申し訳ないので」

というより、わたし以外に誰かいる状態でせんぱいと会話とか、黒歴史を皆に見られるに決まってるので勘弁願いたいです。

おかげでなかなかせんぱいと話す機会が作れないんですけどね。

奉仕部の方も最近はあんまり行けてないですし……。
「そうか。って、俺を残すのはありなのかよ」
「う……。で、でもせんぱいはどうせ奉仕部で居残りじゃないですか。だからまぁ、ありかなぁって。そ、それに頼りになりますし一緒にいて幸せ……い、いえ！　なな、なんでもないです！」
事前に想定してない話を振られると弱いです、わたし。　前半の建前は問題ないのにどうして後半の本当の理由まで言っちゃいそうになるのかなぁ。
「さ、さぁ、時間は有限ですよ。早く仕事しましょう！」
わたしの答えを聞いて一瞬固まったせんぱいに、隣に座るように急かすと、わたしは書類へと視線を落とした。
うぅ、緊張して内容が頭に入ってこない……。

うぶはす、初めての恋煩い（3）

うーん、何かこれ、勘違いしかしようがないんですが。
一色にお願いされて生徒会を手伝うことになった俺が、仕事中に抱いた感想はそのようなものだった。
そりゃ、前のあざといお前だって普通の男子なら勘違いするだろうけど。でも、最近の一色の中でも今日の一色は破壊力がひたすらやばかった。
まず、物凄い勢いで隣に座ってる俺の顔をチラチラ見る。もう、下手したら書類より俺の顔を見てる方が長いんじゃないかと言うレベルで。
たまに呆けたようにじっと見つめてくるし、気になって視線を合わせたら急いで視線を落として書類に集中する振りをするがその横顔と耳が朱に染まっている。
更に書類を取る時に一度だけ手が重なったことがあったが、少しの間固まった挙句、手を引っ込めて首をぶんぶん振りながら〝ひゃう、あわわわわ〟とか言って、落ち着くまでしばらくかかった。　さすがイロハエル、可愛い。
極めつけは、お互いの距離。最初は隣と言ってもそこそこ離れていたのに、バレないようにそろーりそろーりと一色が動いた結果、既にお互いに体温を感じられる距離まで近づいている。
バレバレだけど、バレないように少しずつ椅子を動かしているのがそれはもう可愛かった。あえて、ん？というように手を止めると、慌てながら動きを止めるあたり、だるまさんがころんだをしている気分だった。
今もちょっと腕を動かしてお互いの身体にあたると、ビクッとなるし、たまに〝ひうっ〟とか〝ひゃいっ〟とか声が出てる。
いや、さっきは勘違いとか言ったけど、これ絶対勘違いじゃないよな。幾ら俺でもわかるぞ？

つーか、こいつどんだけ初心なんだよ。仮に相手が一色じゃなかったら演技を疑ってたくらいだわ。視線を合わせるだけで赤くなるし、話しかけるだけで肩が跳ねるとか……いや、可愛いんだけどね。コマチエルに並ぶくらい。

でも、ここまで初心だと悪戯心が湧く。

普段の俺なら絶対言わないだろうけど、そういうのを言ってでもからかいたくなるというか……。俺って、Sだったっけ。いや、でも可愛い生き物を構いたくなるのは人間の本能だから仕方ないな、うん。

「一色」

「っ！　え、はい、なんですか？」

まず始めに声をかけると、一色の肩がビクンと跳ねてソワソワと落ち着きが無くなる。なんかこの時点で既に可愛い上、微妙に罪悪感を感じるが、ここはあえて進むことを選択する。

「最近、あざとさが無くなってやたら可愛くなったが、どうかしたのか？」

「……ふぇ？」

あ、固まった。

可愛いとか言われ慣れてるはずだろうに、固まるのか。最近の一色の初心さなら慌てるとは思ったが、完全にフリーズするとは思わなかった。

「はわわわわわ、かかかかかかわいい、せ、せんぱいがかわいいって……」

再起動したら今度は慌て始めた。人間ってここまで赤面できるもんなんだな。一色の顔が林檎みたいに真っ赤になっている。

実際、可愛いの一言だけでここまで慌てるとか、すごいわイロハエル。妹補正がなければコマチエルを越えてるかもしれん可愛さだ。見てるだけで癒される。

一色は再起動こそしたものの、壊れたレコードのように〝か、可愛いって、せ、せんぱいが可愛いって、えへへ〟みたいなことを繰り返す。

「落ち着け、一色。可愛いとか普段から言われてるだろうに、慌てすぎ

だろ」
ひとまず会話ができるように一色をクールダウンさせようとした。
した、のだが……
「ひゃ！　だ、だって好きな人にそんなこと言われたら焦るのも……あっ」
言っちゃったよ、こいつ……。まぁ、バレバレだったけどさ。
一色は真っ赤になったまま口元を袖で隠した状態で再び固まっているし、俺の方もこの状況でなんて言えばいいのか見当もつかない。
当然の帰結として俺と一色の間には沈黙が広がるわけで……。
「……」
「……」

「あ、あの！」
しばしの沈黙のあと、一色が突如として大きな声をあげた。
完全に声が上ずっていて、明らかにテンパってしまっている。
その目には涙が浮かび、視線は一色の心境を表すようにあちらこちらへと行ったり来たりを繰り返していた。
「わ、わたし！　せ、せんぱいのことが、す、好きです！」
もう混乱して半ばやけっぱちになっているのだろうか、一色は涙目のまま俺のことが好きだと告白した。
そして、そのままの勢いで目の前の机へと顔を伏せる。
「うー、うー、うー」
「い、一色？」
泣いてるわけではないようだが、机に突っ伏してうめき声をあげる一色へとおそるおそる声をかける。
大丈夫か、こいつ。
「こ、こんなはずじゃなかったのにぃ……も、もっとこうロマンチックな状況で告白するはずで……うわぁぁぁぁぁ」
「い、いや、なんか悪かったな。俺が変なこと言わなければ良かったんだが」
「うぅぅぅ、せんぱいに弄ばれましたぁ」

「人聞きの悪いこと言うなよ……。つーか、一応自爆したのはお前の方だから」
「だ、だって、せんぱいと話してると頭真っ白になるんですもん」
突っ伏した状態から少しだけ顔を上げて、上目遣いにこちらを見遣る一色。
「せんぱいのことが好きって自覚してから、せんぱいと話そうとすると何もかも上手くいきませんし、いっつも混乱しておかしなこと言っちゃいます」
「せんぱいのせいですよー。責任取ってくださいよー、せーきにーんー」
一色がうーうー唸りながら俺へと文句を言う。
と言っても、こいつ今まではそういうのなかったんだよな。
「お前、なんで俺にはそんな初心なのに、葉山にはアタックできたんだ？」
素朴な疑問。
別に葉山相手には普通に話せるのになんで俺に対してだけ混乱しまくってるんだろ、こいつ。
「……葉山先輩のことは恋じゃなかったみたいです」
僅かの間のあと、一色はそう言った。
「あんだけアタックして、色々言ってたのにか？」
「そうですよ。というか、わたし今まで恋って言うのがよくわかってなかったみたいで、ちゃんとした恋をしたことがなかったんですよね、たぶん。　だからせんぱいがわたしの初恋なんです」
「せんぱいへの想いに比べれば、葉山先輩なんて雑誌を適当にめくったらかっこいい人がいていいなと思った、くらいですよ」
「だから、こんなどうしようもない気持ちになるのも、せんぱい相手が初めてです」
相変わらず林檎のように赤い顔のまま、真っ直ぐにこちらを見つめて、一色はそう続ける。
その瞳は熱に浮かされたような深く強い情愛の色を孕んでいた。
それでいて、今までのように言葉に詰まらないのは、その言葉が半

ば独り言のように呟かれているからだろうか。
「わたしは、せんぱいのことが、好きなんです」
改めるように、一色は一言一言を区切りながらはっきりと口にした。

「ふぅー、今度こそちゃんと言えました」
「まぁ、最初の告白は完全に勢いで言ってたからな」
「あ、あれはもうノーカンです！　……と、とりあえず、せんぱいはわたしに協力する義務があります！」
「協力する義務？」
「そうです！　わたしを虜にしてこんなどうしようもない気持ちにした以上、責任をとってもらいます！」
理不尽だな、おい。
まぁ、でもこいつをこんなポンコツにしてしまったのは俺らしいし……今の一色相手なら協力しても構わんか。
「また責任か……協力って何すればいいんだ？　お前と付き合えばいいのか？」
「……っつつ、付き合うってなにしゅればいいんですか!?きききき、きすとかしょんなのむむむりです、あわわわわ……」
「……すまん、お前には付き合うとか早かったな、うん」
俺が悪かったから早く落ち着いてくれ。
じゃないと話が進まない。
なんとか一色を落ち着かせると、彼女は協力の内容について話し出した。
「わ、わたしは、せんぱいに、な、慣れる必要があると思うんです」
「確かに今のままだと普通の会話にすら支障をきたすが」
最近は話すたびに顔を赤くしているし、今みたいに同じ部屋にいるとこいつは緊張して固まってしまう。今日の仕事とかこいつ絶対進んでないよね。
あと、この状態で奉仕部に来られるとかなりまずいことになる気がする。

具体的には女子二人に血祭りに上げられるというか、氷漬けにされるというか、そんな予感がしてならない。
「で、ですよね!? す、好きな人相手に話すのも難しいって、将来困りますよね!? せんぱいに振られた後も、恋愛なんて無理でしょう!?」
将来と言うか、今困ってるだろ。
というか、なんで振られる前提……あー、いや、何でか知らんが、こいつ俺に振られると思ってんのか。どうしよう、誤解を解くべきか。
でも、こいつ今の時点で既にいっぱいいっぱいみたいだからなぁ……。とりあえず、誤解を解くのはもう少し先の方がいいか。
「あー、そうだな、はいはい。……で? 俺は何をすればいいんだ?」
「て、適当ですね……。 せんぱいはこれからわたしの練習台になってもらいます。え、えーと……と、とにかく! わたしが緊張しなくなるまで、わたしと、ふ、二人っきりで時間を過ごしてもらうんです!」
「ふーん……まぁ、それくらいなら協力するぞ。俺もお前とまともに話せないのは困るし」
でも、出来ればうぶはすのままでいて欲しい。理想はある程度慣れつつ、ちょっとつつけば真っ赤になるくらいだな。
「い、言いましたね! 言っちゃいましたね! じゃ、じゃあちょっとそこで、たた、立っててくださいね」
「お、おう、これでいいか? つーか何をする気だ?」
なんか、そこまで念押しされるとほんとに言っちゃった感があるんですが……。
一色の呼吸が荒い上、目も覚悟を決めた感じになってるし、本気で何されるんだろうか。
「ふー、ふー……い、行きますよ……えいっ!」
一色は可愛らしい掛け声と共に、俺へと飛びつくと、そのまま俺の背中に腕を回す。
ちなみに、反射的に俺は無実を訴える人のように両手を上げていた。
……つーか、これ抱きついてきてるよな。

そりゃ、正面から一色に抱きつかれたのは初めてだが、前は背中に抱きつくとか普通にあったはずだ。それなのにあんな覚悟決めたような顔をする必要はあったのだろうか。
「協力ってこういうのもやるのか、一色。……一色？」
俺に抱きついたまま、ガチガチに固まって動こうとしない一色に声をかける。
しかし、それに対して一色は一切の反応を見せることはなく、不思議に思った俺は一色の顔を覗きこんだ。
「……きゅう」
……どうやら、一色は目を回して気絶しているようだ。
自分から抱きついてきたのに気絶とか、マジか。　これ、こいつが俺に慣れるとかあるんだろうか。少なくとも相当に時間かかりそうだな……。

「とりあえず、抱きつくのはまだ先ということで、手を繋ぐことにしたわけだが……お前、手汗がやばいぞ」
「うううう、うるさいです！　お、女の子相手に手汗がどうこう言うとかデリカシーがありませんよ、最低です！　な、なのでそれはわたしの手汗じゃなくてせんぱいの手汗です！」
「あー、はいはい。　この手汗は可愛い後輩と手を繋いで緊張してる俺のものだな、きっと」
「ひゃ、ひゃい！　そ、そうです！　かかか、可愛い後輩と、て、手を繋いでるんですから、せんぱいが手汗をかくのも当然です！」
とりあえず、気絶から回復した一色に、俺はまずは手を繋ぐところから始めるのを提案した。この状況はその結果である。
まぁ、手を繋ぐまでにひと悶着あった上、更に手を繋いでからもこんな感じで落ち着きが無い。でも、天使だ。
「お、そろそろ下校時間だな」
「え？　あ、ほんとですね」
ふと思い立って時間を確認してみると、既に結構な時間が過ぎて帰るべき時間が迫っていた。

まぁ、あんだけ色々話した上、一色が気絶してた時間もあるから、そりゃこんだけ時間が経ってるのも当たり前か。
「うー、も、もうちょっとこうしていたいです……」
一色はそう言って、不満そうに口を尖らせる。
不覚にも、その言葉と仕草に少しドキッとした。というか、特に噛んだりしてないのは、無意識のまま思わずこぼしてしまったからだろうか。
「まぁ、明日からも手伝ってやるから。　……それとも、このまま手を繋いで帰るか？」
ドキッとさせられて悔しいので、少し仕返しをしてみた。
「うぇっ！　こ、このまま、て、手を繋いで帰るってまるで、つつつ、付き合ってるみたいで……」
ちょっとつついただけでこれとか、面白いというか可愛いというか。イロハエルはマジで愛でるべき天使だな。癒されすぎてそろそろ浄化どころか蒸発しそうなまである。
「ほら、冗談だから帰るぞ。　仕事は終わらなかったから、また明日だな」
「……むぅー、せんぱいのバカ」
冗談とは言ったものの、何だかんだで一色の上目遣いに負けた俺が、結局手を繋いで帰ることになるのはまた別の話。

うぶはす、初めての恋煩い（4）

後日。

「抱きついても気絶しないようになったのはいいが……お前、心臓の鼓動がやばいぞ。　大丈夫？いきなりぽっくり心臓が止まったりしない？」

「うー、ドキドキするのはもうどうしようもないですよ……。ほっといてください」

あの後、何度も一色に付き合って触れ合いを重ねた結果、一色はある程度俺に慣れることに成功した。

少なくとも前のように会話するだけで精一杯ということはなくなり、手を繋ぐくらいなら多少緊張はするものの問題なくできるようになった。

ただ、それでも抱きつくというのは難易度が高いようで、何度やっても毎回身体が緊張で強張っている。それでもこの状態で気絶せず、会話もできるというのは大きな進歩だ。

これだけ慣れたなら言っても大丈夫か。

「なぁ、一色？」

「んー……な、なんですか、せんぱい」

俺に体重を預けたまま、安心したように目を細める一色が、俺の声に反応して少し焦りつつ意識を戻す。

俺は一色の意識が戻ったのを確認すると、一拍置いて、口を開いた。

「好きだ、一色」

「……?!?!?」

長い沈黙の後、俺の言った言葉をなんとか理解した一色が混乱したように目を白黒とさせた。

顔がみるみるうちに紅潮し、俺の腕の中にある身体が硬直したように固くなる。

「ふぇ、ひゃ、え、えっと……あ、あれですよね！　いつもわたしに可

愛いって言うみたいにからかってるんですよね!?」
混乱しきった一色は、最終的にそんな結論に至ったらしい。
目に涙をためて俺を下から睨むと、からかわれたことへの不満を強調するように頬を膨らませた。
「……言っておくが、さっき言ったのはからかいじゃないぞ」
はっきりと言い含めるように一色へと言葉を紡ぐ。
そして、そのまま出来る限り真剣な目で、不安そうに揺れる一色の瞳を覗き込んだ。
「というか、いつも一色に可愛いって言ってるのも、本心だぞ。　からかうためでもあるが、嘘は言ってない」
「……え、ほ、ほんと、なんですか……？」
再び沈黙を挟んで、一色はおそるおそる俺へと問いかける。
「あぁ、ほんとだ。　俺が一色のことが好きなのも、事実だ」
「ふぇ……」
俺が一色への想いを再び口にすると、一色は力が抜けたように俺へと体重を預けた。
俺はそれを受け止めると、夢見心地にいるような顔でぼーっとする一色を揺さぶり、現実へと引き戻す。
「それで、一色はどうだ？」
「え、どうって……？」
「俺のこと、その……好きか？」
どうにもこういうのは苦手というか、柄じゃない。こういうところで詰まってしまうし、俺も一色の初心さを笑えない。
ただ、俺が告白への返事を求めていることはちゃんと伝わったようだ。
先ほどからずっと顔の赤い一色は更に頬を朱に染め上げて、〝ぁぅぁぅ……〟と奇妙なうめき声を上げながら口を開いたり閉じたりする。
しばしの沈黙のあと。
ようやく混乱と自失から回復した一色は、しおらしく体を縮めて、顔を赤らめたまま蚊の鳴くような小さな声で言葉を発した。

「その……わたしも、せんぱいのこと、すきです」
「だから……わたしと、つきあってください」
どこかあどけなく、幼い子供のようにたどたどしい口調で、一色の言葉は紡がれる。
あまりに弱々しく小さな声ではあったが、この至近距離ではそれで十分だった。
「じゃあ、これからよろしくな、一色」
「……はい、おねがい、します」
一色はふわりと控えめに微笑んで、ぽやぽやとした幼い口調のままそう返した。

「はぁー、なんだか夢みたいです。気持ちが落ち着かないというか、ふわふわするというか……わ、わたしがせんぱいの彼女になったのって現実ですよね!?」
「夢じゃないから、安心しろ。つーか、お前さっきからそわそわしすぎ」
「だ、だって！　叶わないと思ってた初恋が叶ったんですよ!?　落ち着けるわけ無いじゃないですか！」
「そもそも、なんで一色が俺に振られると思い込んでたのか謎なんだが」
一色のスペックならたいていの男子が靡くだろ。少なくともあんだけ真っ直ぐ想いを向けられたら絶対に心が動くはずだ。
動かないとしたら葉山みたいな特殊性癖の持ち主くらいじゃないだろうか。……あいつがホモの可能性がにわかに浮上してきた。今度から出来る限り避けよう。
「そりゃあ、奉仕部のお二人はわたしより付き合い長い上に素敵な人たちですし……その上ちょっと前までのわたしはポンコツでせんぱいと碌に会話もできませんでしたもん」
「うー、今からあのお二人に靡くとかないですよね？　大丈夫ですよね？　もしそうなったら泣きますよ、わたし」
一色がどこか怯えるように俺を見つめる。

もちろん、今更そんなことはありえないんだが、どうやらこいつは夢見心地から帰ってきて不安になっているようだ。
「なんで奉仕部の二人が出てくるのかわからんが、今の俺が好きなのはお前だ。だから安心しろ」
「……ふわぁ……」
一色がうっとりしたように表情を緩め、力の抜けた声を出す。
可愛いんだけどさぁ……なんかこう、駄目な子を見ているような気分になる。大丈夫か、こいつ。すぐ騙されちゃいそうなんだけど。
「つーか、お前はすぐ赤くなったりする自分のことを嫌われると思ってるみたいだが、そんなことはないぞ」
「んー……そういうのって、普通相手するのがめんどくさいんじゃないんですか？　わたしいっつも慌ててましたし」
「確かに会話が成り立たないのは困ったけどな。でも、前のあざといお前より、初心で純真な今のお前の方が可愛いし、好きだぞ」
「……あ、ひゃう、え、えっと、」
俺の言ったストレートな言葉に、一色はしどろもどろになって言葉に迷っている。
未だにこういうストレートな言い方に慣れないらしく、言われるといつも一色は頬を紅潮させて慌てたように視線を彷徨わせるのだ。
「そのぅ……う、嬉しい、です」
「でも、それだと……今の少し慣れちゃったわたしは駄目じゃないですか？」
本当に嬉しそうに口元を綻ばせたあと、しかし、一色はすぐに不安そうに眉をひそめてしまう。
「いや、今くらいがちゃんと会話もできてちょうどいいな。……まぁ、これから先一色から初心さがなくなったとしても安心しろ。既に一色は俺の中で天使として殿堂入りしてるから、俺の気持ちは変わらん」
「て、天使って……言いすぎですよ、もう。　……でも、よかったです。これからもわたしのこと、す、好きでいてくださいね？」
一色は俺の言葉に安心したようにほっと息をつくと、微笑んでそう

言う。
俺からすれば、俺の一色への想いはすでに確固としたものだが、一色はそれをまだ信じ切れていないというか、どうにも不安なようだ。
……まぁ、一色を安心させるのも、彼氏として重要な役目だよな。
多大な悪戯心と共に、役目を免罪符として次の行動を決める。
「一色、まつげにほこりがついてるぞ」
「え、ほんとですか？　どっちの目です？」
「あー、待て待て。取ってやるから、目を瞑れ」
俺の言葉に目を擦ってほこりを取ろうとする一色を、止める。
そのまま俺の言ったことに素直に従って、顔をついっと上げて目を瞑る一色に、チクチクと罪悪感を刺激された。
しかし、俺には彼氏の役目という免罪符がある以上、ここで止めるつもりはない。
俺自身も目を瞑って、一色の顔へと自分の顔を近づける。

そして。

「……ん、んぅ!?」
一息に唇を重ねると、一色が混乱したような声を発する。
目を瞑っていても、一色が驚愕したように閉じていた目を大きく見開いたのがわかった。そうして、状況を把握したであろう一色の身体は、一気に強張る。しかし、固くなったその体はそれ以上の反応を示すことはなく、俺を拒絶しなかった。
唇と唇で繋がっているからだろうか。　目を見開いていた一色がゆっくりと目を閉じ、俺の存在を感じ取ろうとするように、自分の唇へと意識を集中したのが感じられた。
抱きしめた腕や重なった唇から感じられる一色の体温が一秒ごとに跳ね上がっていく。
やがて、その身体からくてっと力が抜けたころ。
どれくらいの間唇を重ねていただろうか。ゆっくりと暗くなりつつある生徒会室で、俺は一色の顔から自分の顔を離した。

離した直後、一色は真っ赤な顔で目を瞑ったまま崩れ落ちる。それを支えるように抱きとめて、俺は一色の顔を覗き込んだ。
「……きゅう」
……案の定一色は気絶していた。
「やっぱり、付き合うの早かったんじゃねぇかな……」
まぁ、可愛いからいいか。
呆れながらも、気絶した一色を揺り起こそうとする俺の顔は、きっと楽しそうに笑っていた。

一色いろはが嫉妬するようです（1）

「せんぱいって好きな人とかいないんですか？」

せんぱいが高校3年生に、わたしが2年生に進級してから、少し。

わたしは生徒会室で、仕事の手伝いに呼んだせんぱいへ、そんな質問をした。

まぁ、いつもどおりはぐらかすか、自虐じみた変な答えが返って来るんだろう。なんて特に期待もせずに、適当に話しの糸口にでもなればいい、と軽く考えてした質問だった。

いや、期待はしてなかったけど、〝俺が好きなのはお前だ〟とかそんな答えが来ればいいのに、とちょっとだけ妄想はしていた。

せんぱいが答えるまでの沈黙の間、そんな妄想で自分を楽しませながらわたしは待った。

ふと、やけに沈黙が長いと思い始めたころ、せんぱいは口を開く。

「好きな人か……いるぞ」

「え？」

聞き間違いかと思った。まさか、そんな……あぁ、でもやっぱり。

そんな風に思考が空回る。

「いや、だからいるぞ。　好きな人」

……どうやら聞き間違いではなかったらしい。

せんぱいの周りには素敵な人がたくさんいて、覚悟はしてたはずなのに、今までの人生で起きたどんなことよりも、その答えはわたしの心を揺さぶった。

「あ、え……そう、ですか」

なんて答えればよかったんだろう。あんまりにもショックで全然頭が回ってくれない。聞きたいことも言いたいこともたくさんあるはずなのに、わたしの口からはどんな言葉も出てこない。

そのままわたしは逃げるように書類の整理に没頭した。それからもせんぱいとは話をしたはずだけれど、全く記憶にない。

ふと、気づけば家の前に立っていた。

そして、そのまま自分の部屋へと逃げ込むように入ると、ベッドに倒れこむ。
せんぱいの好きな人。それは、誰だろう。あの時聞けばよかったのに、ショックが大きすぎて、そんなことも思いつかなかった。
〝だからいるぞ。　好きな人〟
さっきのせんぱいの言葉が繰り返されるとともに、胸がぎゅっと押し潰されたように息苦しくなる。
奉仕部を見ていて、覚悟できていると思っていた。でも、駄目だ。ホントは覚悟なんて全然できてなかった。
もしそうなっても、強がれる。わたしの方が後追いだけど、本気で好きになったんだから必ず振り向かせて見せる。そんな風に強がれるはずだったのに、少しも強がれない。
好きなのに、どうしようもなく好きなのに。届いて欲しかったのに、叶わない。
その事実に、心が折れそうだった。
葉山先輩のときとは全然違う。あの人に振られたときは、こんなに苦しくなかった。
雪ノ下先輩と葉山先輩の噂があったときだって嫉妬なんてしなかったのに、今はせんぱいの心を奪った誰かが狂おしいほど妬ましい。
恋愛ってもっと賢く立ち回って、楽しいものなんだと思ってた。
ほんとは違うんだ。本気で人を好きになるってこんなに苦しいことなんだ。
馬鹿だなわたし、こんなことになってから気づくなんて。もっと早く気づいていれば、もっと死に物狂いでせんぱいにアプローチしたのに。
葉山先輩のことが好きだっていう嘘をつかずに、せんぱいのことが好きだって伝えてたらどうだったんだろう。
わたしの片思いじゃなくて、せんぱいが受け入れてくれる可能性が見えてから……そんな意地を張らずに、好きになってすぐ告白していたら。

告白してからのアプローチなら、少しは女の子として意識してくれたんだろうか。
今更だなぁ……。
もう、せんぱいには好きな人がいるのに。あのせんぱいが素直に好きだっていう人なんだ。きっと勝てない。
本当に、今更だ。
どうしてあんな嘘をついて、意地を張っちゃったんだろう。
片思いでいいから、頑張ればよかったのに。それなら、こんな後悔しなかった。こんな苦しい思いだって……。
……そんなわけないか。本気で好きだったんだもん。失恋したら、苦しいよね。
でも、少しはあったかもしれない可能性を逃しちゃったのは、悔いが残るなぁ……。

ああしたら、こうしたら、という考えが思い浮かぶたびに、心が際限なくネガティブな方向に落ち込んでいく。
苦しい。　悲しい。　辛い。
嵐に遭ったようにぐちゃぐちゃになった感情に疲れ切ったわたしは、ゆっくりと瞼を閉じる。
目の横を伝わって落ちていく涙を感じながら、わたしの意識はどこかへと沈んでいった。

「せんぱい」
翌日。再び生徒会室でわたしはせんぱいに呼びかける。
昨日のことは本当にショックだった。今も正直苦しい。
でも、好きだから。本当に、好きだから。どうしても諦め切れなくて、落ち込んだ気持ちを引きずったまま学校へ来て、何とかせんぱいに仕事の手伝いを頼んだ。
「昨日言ってたせんぱいの好きな人って、誰なんですか？　奉仕部のお二人とか？」

昨日聞けなかったことを聞くために。
「なんでお前に言わないといけないんだよ」
「えー、教えてくださいよー。なんなら、少しくらいはお手伝いしますよ？」
一応、本当にお手伝いはするつもりだ。
まぁ、そのお手伝いはせんぱいのデートの練習とかに偏る予定ではあるけど。デートの練習中にせんぱいがわたしのことを好きになってくれればいい、なんて淡い期待を込めて。
「……じゃあ、当ててみてくれ。ある程度聞かれたことには答えるぞ」
せんぱいは少し眉をひそめて考え込んだあと、そう言った。
よほどしつこく聞かないと答えてくれないと思っていたので、その返答は正直意外だった。わたしに手伝いを求めるほど、せんぱいはその人のことが好きなんだろうか。胸が締め付けられたように苦しくなる。
けれど、わたしはそれをおくびにも出さず、顎の下に人差し指を立てて考え込むそぶりを見せてから、聞いた。
「うーん……じゃあまず、その人のおっぱいは大きいですか？」
「出だしからぶっこんできたな、おい。……大きくもないが、たぶん小さくもないな」
あ、でも答えてはくれるんだ。というか、大きくもないし、小さくもない？
「え？　結衣先輩は大きいですし、雪ノ下先輩はぺたんこですし……あれ？」
「お前、雪ノ下に殺されるぞ……まぁ、それならどっちでもないんじゃないか？」
奉仕部のお二人じゃない？　それなら少しくらいは勝ち目があるかもしれない。ちょっとだけ気分が上向いた。
でも、それならそれで本当に誰なんだろう。
あ、いや、まさかとは思うけど……。
「……と、戸塚先輩とか？」
「俺はどう思われてるんだ、お前に……戸塚は性別戸塚で天使だが、流

石にそれはない」
　どう思われてるって、あれです、好きな人です。……出来れば、今はまだ気づかないでください。せんぱいに遠ざけられるのは、耐えられそうにないので。
「性別戸塚って……じゃあ、大穴で性別葉山先輩とか？」
　これについてはそれこそないとは思うけど。でも、せんぱいって葉山先輩と妙に通じ合ってるところがあるからなぁ。一応確認のために聞いてみた。
「おい！　それは絶対有り得ないからやめろ！　お前は海老名さんかよ……」
　力強く否定してくれた。よかった、本気で好きになった人が同性が好きだったら立ち直れない。相手が戸塚先輩なら理解はできるけど。
　あと、わたしは海老名先輩みたいに男の人同士とか好きじゃありませんからね。
　むしろ極めてノーマルです。好きなのはせんぱいですし。
「なんで俺の好きな人の話題で性別が出てくるんだろうな……俺の好きな人の性別は女だからな」
　日ごろの行いのせいかと。いつも戸塚先輩の話をしてるわけですし。
「えーっと、じゃあ……元同じクラスの川なんとか先輩とか？」
　川なんとか先輩は確かせんぱいのことが好きだったはずだ。
「あぁ、川……川……川崎か。　あいつじゃないぞ。つーか、同じクラスだったやつじゃない」
　同じクラスだった人じゃない……ってことは三浦先輩や海老名先輩も違うはず。
　となると……あ、そうだ。
「……あの海浜高校の折本さんですか？」
　この人はせんぱいと昔何かあったみたいだし、ありそうだ。
　それに、この人なら学校そのものが違うから接点もないし、勝率はまぁまぁありそう。
「折本？　あいつは違うな。昔告白して振られただけだ。その告白

も、勘違いからだったしな」
せんぱいはそう言うと、苦虫を噛み潰したような顔をした。
というか、昔何かあったっていうのは告白だったんだ。せんぱいに告白してもらえたなんて、羨ましいな……。
せんぱいから告白して欲しいなんて贅沢は言わないから、わたしから告白して受け入れてくれたらいいのにな……。
で、折本さんもないとなると……
「……はるさん先輩はどうですか？　あとは、城廻先輩とか」
年上とかかな？
この二人は強敵っぽいから嫌だな……。
「二人とも違うな。　雪ノ下さんは正直苦手だし、城廻先輩はもう卒業した上、そもそも接点がないだろ」
ほっ、よかった。
でも、そうなるとせんぱいの好きな人ってほんとに誰だろう。
「この二人も違うんですか……じゃあそもそも、年下ですか、年上ですか？」
とりあえず、ピンポイントでやっても当たらなさそうなので、範囲を絞ってみることにする。
これで、ある程度絞れるはずだけど。
「……年下だな」
答えは年下。
好きな人が年下ってことはせんぱいの好みも年下なんだろうか。だとしたら嬉しいけど。
でも、年下で該当するのって誰かいたかな。
「年下ですか……まさか」
一人、いた。
「……」
わたしが答えに思い至った瞬間、せんぱいがビクッと肩を揺らす。わたしが知ってるせんぱいと関わりがある年下なんて、一人しかいない。
「せんぱい……小学生は犯罪ですよ？」

小学生と言うか、今年になってから中学生になったんだっけ。でも、たぶんまだ12歳だろうから、犯罪には違いない。
「……おい！　俺はロリコンじゃねぇよ！　つーか、なんでそこでルミルミを出した！」
わたしの言葉にせんぱいは一瞬、意味がわからないという顔をしたあと、立ち上がって大声で抗議した。
いや、なんでって、今もルミルミとか言ってますし、日ごろの行いですよ。
というか、ここまで該当なしだと、そもそもわたしが知らない人なのかもしれない。
わたしが知ってる年下の子なんてクリスマスイベントの子くらいだし。
でも、それを聞く前に聞いてみたいことがある。
わたしがせんぱいに好きになってもらうために、必要な質問。
「そもそも、せんぱいはその人のどういうところを好きになったんですか？」
少しくらいは参考になるかもしれない。
「あー……」
わたしの質問に、せんぱいは答えづらそうな顔をした。
それも当然か。普通は答えづらい疑問だろう。でも、わたしは聞いてみたかった。わたしの好きな人の心を占めるのはどんな人なのか。
「そうだな……そいつは会う度に絡んでくるやつなんだが、絡んでくる時の笑顔と明るさとか、実は意外に頑張り屋なところとか、それでいて見てると放っておけないところとか」
「そういうところに……惹かれたのかもな」
そう言うせんぱいの顔はどこかいつもと違っていて、ひどく穏やかで優しそうだった。口元には微かに笑みまで浮かんでいる。
ずるい、ずるい、ずるい。
せんぱいにそんな顔をさせる女の子が、せんぱいの心を独占してしまっているその子が、羨ましくて、妬ましくて、しょうがなかった。
どうしてその立場がその子のものなんだろう。

せんぱいに好きになってもらっておきながら、まだ恋人になってない。わたしなら、わたしがその立場なら、絶対にせんぱいを逃したりしないのに。せんぱいのためなら何だってするのに。
どうしてせんぱいの好きな人はわたしじゃないんだろう。
制御できない感情に、顔がくしゃっと歪んで泣きたくなる。自分でもわかったその表情の変化を俯くことでどうにか隠した。
「そう、ですか」
なんとか震えずに済んだ声で、それだけを返す。
わたしって、こんなに嫉妬深かったんだ。せんぱいに好きなってもらいたいのに、こんなわたしじゃ駄目だよね、当然。
人を好きになるって、どうしてこんなに苦しいのかな……。
わたしの返答を最後に、生徒会室に沈黙が落ちる。
何か言わないと、そう思ってもわたしの口は動かなかった。

黙々と仕事をした結果、せんぱいの仕事は終わったらしい。
片づけを終えて立ち上がると、生徒会室を出ようとする。
引き止めたかったけど、やっぱりわたしは何もいえなかった。
「……まぁ、」
そんな状況で。
しかし、せんぱいは生徒会室の扉に手をかけた状態で立ち止まり、背後のわたしに向かって振り向いた。
「お前にとっては一番近くて遠いやつのことだから、わからないのも無理はないな」
そして、最後にそう言い残すと、せんぱいは生徒会室を去っていった。
「……え？」
それは、どういう意味だろう。
わたしにとって一番近くて、一番遠い。それは一体誰なんだろうか。
あまりにも意味深なその言葉に、わたしは混乱する。

「一番近くて、一番遠い……」
〝だから、わからなくても無理はない〟
その言い方だと……まるで。
「……わたし？」
言ってしまった言葉に、体がかあっと熱くなる。
期待するな、と理性は言うけど、でも考えれば考えるほどせんぱいが好きな人はわたしなんじゃないかと思ってしまう。
年下で会う度に絡んでくる女の子。そもそもせんぱいと関わりがある年下の子なんて、わたしとルミルミちゃん？くらいだ。その上で、わたしにとって一番近くて遠いという意味深な言葉を加味すれば……残るのは、わたしだけ。
「えっと、まさか……ほんとに？」
どうしよう。本当にどうしよう。
とてつもなく嬉しい。せんぱいがわたしのことが好きだなんて、夢みたいだ。思わず口元が緩んで、今すぐ走り出したいような、居ても立ってもいられない気持ちになる。
えっと、今すぐ追いかけてせんぱいに告白するべきかな。
だけど、やっぱり勘違いだったら……。
でも、どう考えたってさっきの言葉はそうとしか受け取れないし……。
だんだんと暗くなっていく生徒会室で、わたしは顔を真っ赤にしたまま悶々とする。
昨日からずっと引きずっていて、今日もあったはずの落ち込んだ気持ちは、いつの間にか吹き飛んでいた。

結局、その日は下校時間いっぱいまで使って仕事を終わらせると、悶々としながら家へと帰った。
更には家に帰ってからもその調子で考え込んでいたものだから、お母さんに笑われて、あれこれとからかわれた。
部屋に篭城することで、なんとかお母さんを撃退したあと、そのまま考えて考えた末に、わたしは決めた。

――せんぱいにあの言葉の真意について聞こう、と。

一色いろはが嫉妬するようです（2）

そのまた翌日のこと。
今日も今日とて放課後になるとわたしはせんぱいを引きずって生徒会室に向かう。
一昨日は、笑顔で。昨日は、落ち込んだ顔で。
じゃあ、今日はというと……。
「せ、せんぱい、こ、この仕事お願いします」
「あ、あぁ、わかった」
やばい、緊張してせんぱいの顔が見れない。たぶん、今のわたしの顔は真っ赤だ。
だ、だって、しょうがないですもん。せんぱいに好きな人がいるって言われてすっごく落ち込んで、わたしがどれだけせんぱいのことを好きか再確認して。
それなのに、せんぱいの好きな人がわたしかもしれないって……そりゃ意識して当然ですよ。
うぅ、体の制御が効かないというか、さっきから絶対にそわそわしちゃってる。仕事も全然進まないし……こ、このままで本当にせんぱいに昨日ことが聞けるんだろうか。
ものすごく緊張してる、わたし。
明日じゃ駄目かなぁ……。あ、駄目だ、明日は休みだし。
いやいやいや、そもそも今日聞くと決めたんだからちゃんと聞かないと。先延ばしにして昨日や一昨日みたいに後悔するのは絶対にいやだもん。
ふー、覚悟を決めて、一色いろは。
大丈夫、せんぱいを諦めることに比べたら、こんなのなんてこと無い。
ふと、昨日せんぱいから返ってきた言葉が、耳元で鮮明に蘇る。
穏やかで、優しそうな顔で、その時はわたしじゃないと思っていた女の子に、向けられた言葉が。

〝そういうところに……惹かれたのかもな〟
……本当に、あの時に比べれば、なんてこと無いんだから。
うん、今なら、言える。
「せんぱい」
「お、おう、どうした？」
わたしがせんぱいに声をかけると、せんぱいは焦ったように返事を返した。
……このせんぱいの焦りはどう見るべきなんだろう。せんぱいの好きな人がわたし、という予想へのプラスの材料と考えていいんだろうか。そうであって欲しい、とは思うけど。
「……昨日の最後に言った言葉って、どういう意味で言ったんですか？」
わたしはきっと今、人生で一番真剣な顔をしているはずだ。
嘘だらけだったわたしが、本気で人を好きになった。そして、こうしてその人と向き合っている。怖いけど、どうしようもなく怖いけど、その人へと踏み込んでいる。
そんな今のわたしの顔が、真剣でないはずがない。
「……」
わたしの疑問に、せんぱいは沈黙で返した。それはどこか言葉を探すような沈黙だった。
そのまま考え込むように黙り込むせんぱいに、しかし、耐え切れなくなったのはわたしの方。
「せんぱい」
沈黙するせんぱいを急かすように呼ぶ。
けれど、それを言った次の瞬間には、早く答えを知りたいという思いが、逆にわたしを急かしていた。
……もう、わたしの方から言ってしまおう。
「せんぱいの好きな人って、その、もしかして……」
「……わ、わた――」
コン、コン

わたしの一世一代の大決心は、無情にもドアのノックの音にかき消された。
さっきまで緊張したようにわたしの言葉を聞いていたせんぱいも、目を白黒させている。
「……ふぅ。　どうぞ、入ってください」
どうにか息を吐いて苛立ちを沈めようとしたが、続いて言った言葉は自分でも驚くくらい低い声だった。
「あの、失礼します。奉仕部のお二人から、こちらに兄がいると聞いて来たんですけど……」
入ってきたのは、黒髪にぴんと立ったアホ毛が特徴的な、可愛い女子生徒だった。たぶん、最近入ってきた一年生だろうか。
その子は生徒会室を見回したあと、せんぱいを見つけて、ニカッと歯を見せて笑った。
「あ、お兄ちゃん！」
お兄ちゃん……この子は、せんぱいの妹？
そういえば、せんぱいには妹がいると言ってたような。
それと、確か……
「小町いいい！」
即座に立ち上がって、妹さんへと駆け寄るせんぱい。
そう、確か、せんぱいはとてつもないシスコンだと聞いた覚えがある。
せんぱいは駆け寄った勢いのまま、妹さん――小町ちゃん？を抱きしめる。
「も、もう！　お兄ちゃん、人前で恥ずかしいから、やめてよ！……えへへ」
せんぱいに抱きしめられた小町ちゃんも、口ではやめてと言っているが、満更でもなく口元が緩んでいるようだ。
頬ずりするような勢いで小町ちゃんを抱きしめるせんぱいと、困ったような笑顔でせんぱいを受け入れる小町ちゃん。
待ちぼうけを食らった苛立ちと突然の小町ちゃんの登場に混乱す

る頭の中で。
ふと唐突に、その光景にひらめくものがあった。
せんぱい→とてつもないシスコン
年下→妹
放っておけない→こんなに可愛い妹なら放っておけないのはわからなくもない
「……」
……なるほど。
オーケーです、わかりました。
つまり……せんぱいの好きな人がわたしというのは、勘違いだったということですね。
……本来、笑顔とは攻撃的なものだという。その言葉に従い、やりようのない苛立ちや失意が、笑みの形にわたしの表情を歪めていった。
きっと、わたしは今、とっても素敵な笑顔を浮かべていることだろう。
……後から考えれば明らかにわたしは混乱しきっていたけれど、このときのわたしはその閃きが正解だと思い込んでいた。
「すみません、お二人とも」
二人の世界を作っていたせんぱいと小町ちゃんに声をかける。
二人は笑顔のわたしを見て、何故か、〝ひっ〟と怯えたような声を上げて互いに抱き合った。更に笑みが深まる。
「えーと、小町ちゃん？でしたか。ちょっとせんぱい……あなたのお兄さんのこと借りますね？」
わたしのお願いにぶんぶんと首を縦に振る小町ちゃん。
せんぱいは捨てられた子犬のような目でそんな小町ちゃんを見ている。……ちょっと可愛いと思いましたけど、許しません。
「お話が終わったら、奉仕部の方に行くようにしてもらうので、そちら

で待ってもらってもいいですか？」
「は、はい！　こ、小町の用事は大したものじゃないので、大丈夫です！家に帰ってから話すので、好きなだけどうぞ！」
「こ、小町ぃぃぃ……」
せんぱいは情けない声で小町ちゃんを呼び止めるも、彼女はニッコリと笑うと、せんぱいに手を振って生徒会室を後にした。
残ったのは、あっさり見捨てられたせんぱいと、にこやかに笑うわたし。
「せんぱい、ちょっとそこの椅子に座ってください」
「……はい」
とぼとぼ、という表現がよく似合う足取りで、向かい合うように並べられた椅子へと座るせんぱい。
それに続いて、わたしもせんぱいの目の前の椅子に座った。
「あのですね、せんぱい」
「お、おう。　なんだ、改まって」
続く言葉を紡ぐために、深く息を吸った。
「……せんぱいがシスコンなのは知ってますが、流石に妹さんを好きになるのはどうかと思います」
「……はぁ？」
わたしの言葉に呆気に取られたような表情で固まるせんぱい。
イマイチ上手く回らない頭で、わたしは図星をつかれたからだろうと考えた。
「あの、血の繋がった兄妹は結婚できないわけですし……その、年下なら、妹とか小学生以外にももっと手頃な子が……」
……例えば、わたしとか。
わたしがせんぱいへと説教している間、せんぱいは呆気にとられた顔のまま、少しの間沈黙していた。
そして沈黙の後、何故か頭痛を抑えるように片手で頭を抱えた。
「あー、一色。お前は誤解してる。とりあえず、まず深呼吸しろ」
誤解って何だろうと思いながら、せんぱいに言われたとおりに深呼吸をする。

新鮮な空気が肺へと流れ込んできて、頭がクリアになった気がした。

「じゃあ、ほら、俺が昨日の最後に言った言葉を思い出してみろ。そしたらわかるはずだ。お前さっきまで小町に会ったこと無かったわけだしな」

せんぱいが昨日最後に言った言葉。

確か、わたしにとってせんぱいの好きな人は、一番近くて遠い……

あっ！

それを考えてみると、さっきまで顔を知らなかった小町ちゃんは明らかに違うはずだ。

気づくと同時に、さっきまで混乱していたことを自覚する。せんぱいが言った重要なキーワードを完全に頭から吹き飛ばして、せんぱいは妹のことが好きなんだと思い込んでいた。

ついでに言うなら、今日の目的を完全に忘れていたことも思い出した。

「うぅぅぅ……」

そして、さっきまでの言動を思い返して、穴でも掘って隠れたい気分になった。

わたしは気恥ずかしさをこらきれずに、そのまま頭を抱えて机へと突っ伏すと、意味の無い呻き声を上げることで、湧き出してくる羞恥心と戦った。

一色いろはが嫉妬するようです（３）

「は、恥ずかしいです……」
「思いっきり暴走してたからな……俺もお前が突然変なことを言い出して、どうしたのかと思ったが」
会話できる程度に恥ずかしさが収まって身もだえするわたしに、せんぱいが言う。
「い、言わないでください……うー、３０分前に戻りたい……」
「まぁ、そういうこともあるよな。中学時代の俺なんてしょっちゅうだったぞ」
「ぐぬぬ、普段ならせんぱいの自虐と一緒にしないでくださいと言うところですけど、今は否定できないです……」
って、そうじゃない。わたしは何でいつもどおりの会話をしてるんだ。
誤解だったんだから、せんぱいの好きな人について聞かないと。
「あの、改めて聞きますけど……せんぱいの好きな人ってわたしで合ってますか？」
「……まぁ、そうだな」
……やったぁぁぁ！　わたしも好きですせんぱい！　今すぐ付き合ってください！
やばい、すっごく嬉しい。正直今にも舞い上がってしまいそうなくらいだ。
あ、でも、ちょっと聞いておきたいことがある。
「……どうしてこんな回りくどいことをしたんですか？」
せんぱいはわたしに好きな人がいると言った。もちろん、好きな人はわたしらしいから、嘘は言っていない。でも、誤解させるような言い方であるのは事実だ。
いや、それだけなら不器用で捻くれもののせんぱいだからまだわかる。
けれど、そのあとわたしが好きな人について聞くと、素直に答えて

くれたのが気になった。合理的でないというか、せんぱいらしくないというか。
「あー、それはな」
説明するせんぱい曰く。
せんぱいが生徒会室を見に来たある日、中から聞こえてくる話の内容を聞いて、部屋に入ることなく扉の前で立ち聞きしてしまったらしい。
ちなみにその内容は、わたしが書記の子と話していたときのもので、話題は主にせんぱいについて。
そして、その時せんぱいが聞いた話に、わたしがせんぱいのことが好きだということも入っていたらしい。
「まぁ、俺も葉山とお前のことで結構やきもきさせられてきたからな。だから、お前に好きな人について聞かれたとき、ちょっとした意趣返しのつもりで、な……」
「……わたし、あの日家に帰ってから泣いちゃったんですけど」
わりとくだらない理由にちょっとげんなりする。
わたしの涙を返して欲しい。あのときはほんとに苦しかったのに。
……まぁ、わたしが本気でせんぱいのことが好きっていうのを再確認するきっかけにもなったけど。
「あー、いや、俺はてっきり俺がお前のこと好きってのはすぐ当てられると思ったんだよ。まさか三日もかかるとは思わなかった」
「うー、そんなの無理ですよ。あの時はめちゃくちゃ落ち込んでたんですから。　そんなすぐポジティブに考えるなんてできません」
「そうだったみたいだな。ほんとにすまん」
そう言って頭を下げるせんぱい。
……まぁ、もともとわたしが葉山先輩のことが好きなんて嘘のポーズをしなければ良かった話ではある。
ちゃんとせんぱいを好きになったときに嘘を止めていれば、せんぱいはやきもきしなかったし、わたしだって変な誤解はしなかった。
そう考えてみるとせんぱいに怒る気にはなれなかった。
というか、もしせんぱいが生徒会室の前で話を立ち聞きしていな

かったらと思うと、むしろ今の状況はかなりいいものなのかもしれない。
　もしそうだったら、せんぱいはわたしが葉山先輩のことが好きだと信じたままで、わたしもせんぱいに踏み込むことは出来なかっただろう。そのまませんぱいはわたしへの想いを諦めてしまっていたかもしれない。
　今は、なんだかんだでお互いに両想いだとわかったんだ。ちょっとしたすれ違いはあったけど、せんぱいと結ばれることができるならわたしはそれだけで十分満足だ。
「ねぇ、せんぱい」
「……おう」
「わたしはせんぱいのことが好きです」
　静かに胸の中の想いを、せんぱいへと告げる。
「……俺も好きだ」
　せんぱいに好きだって言われました。すっごく嬉しいです。もうほんとに念願叶って泣いちゃいそう。
「……わたし、結構嫉妬深いですよ。せんぱいの好きな人のことが羨ましくてしょうがなかったんですから」
「まぁ、そこはお前が嫉妬しなくていいように、安心できるように頑張るが……。お前こそ、俺はかなり捻くれてるだろ。俺でいいのか？」
「そんなのずっと前から知ってますよ。……せんぱいがいいんです。ううん、せんぱいじゃないと駄目なんです」
　そうだ、わたしはせんぱいがいないと駄目だ。
　せんぱいがわたしから離れていってしまう想像をしただけで、血が凍るような怖さがわたしを襲う。
　一昨日から昨日までずっと感じていたその恐怖は、せんぱいへの想いを再確認させるとともに、わたしからしがらみとか意地とかあらゆるストッパーを吹き飛ばしていった。
「だから、わたしと付き合ってください、せんぱい」
　なんとか緊張をこらえて、最後の言葉を言い切る。
　両想いなのはわかっていても、それでもまだ怖さがあった。

「……あぁ、俺からもよろしく頼む、一色」
……やった、やった、やったぁぁぁ！
せんぱいと付き合えた、せんぱいと付き合えた！
嬉しい。　嬉しくて死んじゃいそうなくらい嬉しい。
やっとせんぱいに想いが通じたんだ。これからわたしとせんぱいは恋人同士なんだ。
「ふふふっ……」
その事実に、わたしらしくない穏やかな笑みが漏れた。
胸をいっぱいにした衝動をどうにか表現しようとして、甘えるようにせんぱいに抱きつく。
そして、胸から溢れ出した言葉をそのまま口にした。
「好きです、せんぱい」
「……俺も好きだ、一色」
わたしに抱きつかれたことに戸惑いながらも、振りほどこうとせず、同じように返してくれるせんぱい。
……幸せってこういう気持ちのことを言うんだろうか。心を埋め尽くす穏やかなものに、そんな言葉が思い浮かぶ。

つまらない嘘で、本心を隠して。　理由をつけて、自分の心に意地を張って。
そのせいで、わたしは好きな人を別の誰かのものにしてしまうところだった。実際はせんぱいの好きな人はわたしだったけど、これがわたしではなかったらどうだろう。
きっとわたしはその相手に嫉妬して、どうしようもなく後悔したはずだ。苦しんで、悲しんで、泣いて、それでも諦めきれずに今まで通りせんぱいに絡んでいただろう。せんぱいのことが本気で好きだから。
一昨日から昨日までのわたしは、少なくともそうだった。せんぱいに好きな人がいることが、あんなにも苦しかったんだ。せんぱいの好きな人のことがあんなにも妬ましかったんだ。
だから、これからはせんぱいに対してはいつも素直でいよう。

せんぱいにいつだって好きを伝えて、せんぱいにもっとわたしのことを好きになってもらえるように頑張るんだ。
「本当に大好きです、せんぱい」
わたしは、せんぱいをぎゅっと強く抱きしめてそう言うと、力を抜いてせんぱいの体温に身を委ねる。
わたしはこれからも、絶対にこの暖かさを離したりなんてしない。

一色いろはは甘えたがり（1）

「総武高の生徒として恥ずかしくないような――」

「学生の本分を弁えて――」

壇上で凛とした様子の少女が、はきはきとしたよく通る声で演説をしていた。

その姿は一種のカリスマすら感じてしまうものであり、校長や教頭などから行われる話では寝入ってしまう生徒たちも、彼女の演説に聞き入っている。

「――以上を生徒会長の話として締めくくらせていただきます。生徒会長、一色いろは」

少女の名は一色いろは。

俺が唆して生徒会長にした後輩である。

少し前までは生徒会長としてあくまで無難の域を出なかった彼女は、ある時を境に今のように人を惹きつける雰囲気を身に纏うようになった。

その結果、彼女は総武高の名生徒会長として知られるようになり、今となっては総武高で最も人気がある生徒である。

彼女を唆しただけの俺が思うべきことではないかもしれないが、俺はそれが少しだけ誇らしかった。

「――だったんだけどな」

「んぅ、せんぱぁい、もっとなでなでしてください」

独り言のように呟かれた俺の言葉を意に介することなく、壇上であれほどまでに視線を集めた彼女は、鼻にかかったような甘えた声を出して俺へとくっついていた。

そして言葉通り、撫でるのを催促するように俺の腕へと頭を擦り付ける。

生徒会長としての凛とした姿からは想像もつかないが、この姿もまた一色いろはである。

こんなにも甘えきった彼女の姿など、壇上を見上げていた生徒たち

には想像もつかないだろう。
見てしまえば幻滅さえするかもしれない。
「せんぱいぃー」
「あー、わかったわかった。　……ほら」
考え事をして一色の相手を疎かにしていたことで、再び一色から不満げな声が上がる。
俺はその不満を解消するために、上目遣いでこちらを見上げる一色を身体ごと引き寄せると、ゆっくりとあやすように頭を撫でた。
一色は構って貰えることで満足したらしく、気持ち良さそうに目を細めて俺へともたれかかっている。
こんな俺らしくも無い行動も、今となっては大分板についてきた。

こうして俺が一色に甘えられるようになったのは最近のことだ。
少し前のことだが、次から次へと舞い込んでくる生徒会の案件や学校の宿題、その他諸々の雑事によって一色は疲弊しきっていた。
そこで俺は一色の仕事を手伝いつつ、気まぐれに〝頑張ってるな〟と言って、彼女を褒めたのだ。
俺の言葉に対する一色の反応はあまりに顕著だった。
彼女は泣きながら俺に抱きつくと、溜まっていたらしい色々な愚痴をぐずりながら俺へと零した。
俺は一色の行動に戸惑いつつも、彼女の零す愚痴一つ一つに相槌を打って聞いた。
しばらくそうしたあと、泣き止んだ一色が俺へとひたすらに甘えてきて……結局その日は下校時間になるまで一色はずっと俺にひっついていた。
それからというもの、一色は生徒会長として非常に大きく成長し、今日壇上で魅せたようなカリスマを発揮するようになった。
そしてそれと引き換えるかのように、今のように俺へ甘えきった姿を見せるようにもなった。
演説や行事といった生徒会長の仕事が終わる度に、一色は俺へと甘えるのだった。

「せんぱぁい……んー、きもちいいです」
撫でられるのがお気に召したらしい一色が、もっともっとと催促するように俺の手に頭をこすりつける。
一色の両腕は俺の背中へと回され、俺もまた片腕を一色の背中に回して、残った手で頭を撫でている。
まるで仲睦まじい恋人同士のように抱き合っている俺と一色。
「ん、せんぱい……好き、です」
「……」
いつものようにそう言って、一色はもぞもぞと動くのをやめて身体から力を抜く。そして、俺へと深く身を委ねた。
一色の女の子らしい華奢な肢体が、すっぽりと俺の腕の中に収まる。
お互いの身体から伝わり合う体温が、感じられる鼓動が、ひどく心地よかった。

……果たして一色は、何が好きなのだろうか。
撫でられることか、或いは抱きついている体勢のことか、それとも――俺のことか。
いや、そもそも今の距離感だって、普通は恋人同士でもなければまず有り得ないものだ。
一色だってそんなことは理解しているだろう。それに、意外と真っ当な感性をしている一色が、彼氏でもない相手にこんな無防備に気を許すとは考えにくい。
だが、今まで一色の口から付き合って欲しいといった旨の発言は聞いていないし、俺も一色に対してそういった発言をしたことはない。
つまり付き合っていない……はずなのだ。最近は俺も自信がなくなってきたが。
更に付け加えるなら、一色は少し前まで葉山のことが好きだと公言していたが、しかし、最近は一色の口から葉山の名前が出ることはなくなった。

状況証拠はそろっている。でも、明確に言葉にされたことはない。
――誰か、教えてくれ。
俺と一色は付き合っているのか……？

＊＊＊

「ふんふふんふふーんふ♪」
生徒会室でいつものように下校時間いっぱいまで甘えに甘えられた後。
俺と一色は、一緒に帰っていた。
「……ご機嫌だな、一色」
生徒会室を出てから、ずっと楽しそうに歩いて、たまに鼻歌さえ歌っている一色に思わず微苦笑が漏れる。
甘えられた後はそのまま一緒に帰っているが、一色はその時いつも上機嫌で歩いている。
その分、帰り道で別れるときは寂しそうだが。
「えへへ、せんぱいに甘えた後ですからね。　そりゃ、とっても良い気分ですよ」
ひどく楽しげな様子のまま、弾むように一色が言う。
「……そうかい」
一色のストレートな言い様に、再び苦笑が浮かんだ。
同時に俺と一色が実は付き合っているのではないか、という疑惑が深まった。
「……最近はお前も、生徒会長の仕事とかほんとに頑張ってるよな」
そんな疑惑を振り払って、俺は一色へと言葉を紡ぐ。
実際、一色は俺に甘えるようになってから、人が変わったように精力的に生徒会長の仕事をこなすようになった。
「……なんですかー？　そんなに褒めちゃって。　また前みたいに甘えちゃいますよー？」
突然一色のことを褒めた俺に、一色が目を見開いた後、からかうよ

うに微笑して言う。
前、というのは一色が初めて俺に甘えたときのことだろう。あの時は一色を褒めたら、いきなり泣き出したんだったか。
「人前ではやめろ。　そうじゃなくて、最近生徒会長の仕事をかなり頑張ってるだろ。　どういう心境の変化かと思ってな」
……まぁ、俺も一色に甘えられるのはそう悪くないと思っている。だから、人前でやめろというのは、逆に人前でなければいいということだ。
一色に甘えられるようになってから、我ながら一色に対して甘くなったと思う。
「……ふふふ、せんぱいはあざといなぁ。　まぁ、わたしが頑張ってるのは頑張った分ご褒美があるからですよ？」
一色も俺の意図を理解したのだろう。
嬉しそうにふわりと微笑んで独り言のように前半の言葉を呟くと、後半で話を戻した。
「ご褒美？」
「ほら、今日だってそうですけど、頑張ったらせんぱいが甘えさせてくれますし」
疑問を言葉にした俺に、一色がそう返す。
「それ、ご褒美になってるのか……？」
俺に甘えているのときの一色は確かに嬉しそうだが。
……やっぱり、俺と一色って付き合ってたりするのか？
振り払ったはずの疑惑が再び首をもたげた。
「もちろん！　わたしせんぱいに頭を撫でられてるとなんだかとっても穏やかな気持ちになれますし、抱きついてるとほんとに幸せです」
先ほどの甘えていたときのことを思い出しているのか、言葉を紡ぎながらも本当に幸せそうに笑う一色。
俺と一色が付き合っているならそう言われて素直に喜べるのだが……たぶん付き合ってない以上、嬉しいとは思うが複雑な気分だ。
というか、なんで俺はこんな不思議なことで悩んでるんだろう。
もういいや、聞いてしまえ。

「……なぁ、一色」
「なんですか？　せんぱい」
声をかけた俺に一色が視線をこちらに向けて、俺の顔を覗きこむ。
「……俺とお前って実は付き合ってたりする？」
よし言った。
そんな俺の微妙な勇気に気づくことなく、一色は不思議そうな顔をする。
そして、首を傾げながら口を開いた。
「えっ、付き合ってませんよね？」
……安心したような残念なような不思議な気分だ。
安心はどちらも〝付き合って欲しい〟なんて言ってないのに何故か付き合っているという謎の現象が起きなかったことについて。
残念なのは……どうしてだろう。
実は俺は一色と付き合いたかったのだろうか。
確かに、最近の俺は一色に対してかなり気を許しているとは思う。一色に甘えられるのも悪くないと思い始めているし。
……というか〝俺たち付き合ってるの？〟って〝お前俺のこと好きなの？〟に匹敵するくらい恥ずかしいのではないだろうか。
聞く前は気にしなかったが、答えが〝付き合ってない〟というものだったため、正直身悶えしそうだ。
幸いなことに、一色は俺の発言をなんとも思っていないようだが。
複雑な気分に思い悩み、内心では先の発言に身悶えしている俺に向けて、一色が口を開く。
前半は悪戯っぽく笑いながら、後半はどこか呟くように。
俺に更なる疑問を与える言葉を言った。
「んふふー、そういうことを聞いてくれるって事は、少しくらい脈アリなんですか、せんぱい？　……だとしたら、嬉しいんですけど」
「はっ？」
「……えっ？」

一色いろはは甘えたがり（2）

「えーと、整理すると、わたしがせんぱいにやたらと無防備に甘えてくるので、実は付き合っているんじゃないかと疑問を抱いた、と」
「……そうだな」
「加えて付き合って欲しいとかお互いに言ってないはずだから、更に疑問は深まったわけですね」
「……まぁ、そんな感じだ」
一色の言葉に更に混乱した俺は、一色へと最近の疑問を全て話した。
それを一色は聞いて、俺の話をまとめた。
「……わたしの認識では、わたしはせんぱいに告白して振られた、ってことになってるんですけど」
まとめられた俺の疑問に対して、気恥ずかしそうに一色はそう言う。
……告白して振られた？
「は？　告白って……？」
「……初めて甘えたときに〝好きです、せんぱい〟って言ったじゃないですか。　あと、それからも甘えるたびに〝好きです〟って言ってると思うんですけど」
一色は俺の言葉に一瞬信じられないものを見る目をした後、ジト目で俺を見上げて、そう言った。
……まぁ、確かに言われた覚えはある。
ただ、その後付き合って欲しいとかは何も言われなかったから、てっきり……
「いや、撫でられるのとか、抱きしめられるのが好きなんだと思ってたんだが」
「……そんなわけないじゃないですか、もう。あの後せんぱいが何も言わなかったので、振られたんだと勝手に思ってましたけど、そんな事情だったなんて……」

「……なんというか、悪かったな」
罪悪感で居たたまれなくなった俺は、一色へと謝罪する。
実際よく考えれば、好きですなんて告白以外の何物でもないよな。
あの時は一色が俺のことを好きなわけがないという先入観で、目が曇っていた。
……そもそも当時は、一色は葉山のことが好きだと思ってたしな。
「……別に、いいです。せんぱいが鈍感なのはわかってましたし」
俺の謝罪に一色はそれだけを返して、俺の少し前に出て足早に歩いていく。
さきほどまで上機嫌だった様子はその歩きからうかがえなかった。
どうやら怒らせてしまったようだ。まぁ、告白を変に勘違いしていたのだから怒るのも無理はない。
ただ、不機嫌そうに足早に歩いているといっても、俺を置いて行くつもりはないらしい。
たまにこちらを確認するようにチラリと振り返っては歩く速さを変える一色を追うように、俺もついていった。

俺と一色が別れる帰り道にさしかかると、一色は俺へと身体ごと振り返る。
ここでいつものように別れを告げて、お互いの家へ帰るのだろう。
そう考えて、明日から一色の機嫌をどう取るか頭を痛める俺。
そんな俺に向けて、一色は深く息を吸うと、真剣な顔で言った。

「わたしは、せんぱいのことが好きです」

今度ははっきりと誤解することのないように。
一色は俺へと告白の言葉を告げた。
俺は予想もしていなかった一色の告白に思わず固まる。
「……怒ってると思いました？」
一色は俺の心情をピタリと言い当てた。
怒って不機嫌になったと思ったからこそ、一色がここで告白してく

るとは全く予想していなかったのだから。
……いや、仮に不機嫌になってなくても予想できたとは思えないけども。　ただ、完全に意表をつかれたのは事実だ。
「……怒ってもしょうがないようなことをした自覚もあるしな」
「わたしだって勝手に振られたって思ってたわけですし、怒ってませんよ。……どちらかと言えば嬉しかったです」
俺の罪悪感を滲ませた言葉に対して、一色は気にしていないという風に微笑むと、話を続けた。
「嬉しかった？　なんでまた」
「だって誤解だったってことは、わたしはまだせんぱいに振られてなかったってことですし。そりゃ嬉しいですよ。……さっきちょっと素っ気無くなっちゃったのは、改めて告白するのに緊張しちゃったからです」
てへっと笑う一色。
そのわざとらしい仕草に少し安心した俺は、僅かに苦笑する。
……きっと一色は俺が気にしないで済むように、そんな仕草をしたのだろう。
なら、俺が返すべき言葉はいつものように一つだ。
「あざとい」
「あーざーとーくーなーいーでーす！」
そう言って笑う一色に、俺も自然と笑みがこぼれた。
和やかな空気が流れて、俺たちの楽しげな笑い声が、人気のない道に響き渡る。
そんな空気が一段落して、一色が切り込んだ。
「……それで、どうですか、せんぱい？」
「……ありがとう？」
一色が俺へ告白の返事を求めて尋ねる。
だが、こんな状況を全く想定したことがない俺は、どう返せばいいか悩んだ末に、我ながらどうかと思う返答を返した。
「どうしてそうなるんですか！」
「いや、こういうのに慣れてなくてな……まぁ、なんだ、好きと言って

くれるのは嬉しい」
俺のよくわからない返答に一色は頬を膨らませて抗議した。
それに対して、俺は取り繕うように言葉を重ねる。
……実際、一色にこうして告白されたのを、俺は嬉しいと思っているらしい。
「じゃ、じゃあ……わたしと、付き合ってくれますか？」
一色は恐る恐る俺へと、問いかける。
その問いに、俺は一瞬だけ考えた後、答えを出した。
甘えられるのを悪くないと思ったのも、告白を嬉しいと感じたのも、どちらもその結論は一つだ。
きっと、俺もまた一色のことが好きなのだろう。
「俺でいいなら……まぁ、よろしく頼む」
だから、俺は一色の告白を受け取った。

「……せんぱい！」
俺の了承に、一色が感極まったように、飛びついてくる。
嬉しさを表現するように俺に抱きついたままぴょんぴょんと飛び跳ねる一色を抑えるように、俺も彼女を抱き返した。
そのままどこか興奮した様子で、もぞもぞと身体を動かす一色を腕の中に閉じ込めてから、しばらくして。
「……んー、せんぱぁい」
どうやら、抱き返したことで一色の甘えスイッチが入ったらしい。
鼻にかかったような甘えた声を出す一色が、猫のように俺の胸や首元へと顔を擦り付ける。
……甘えている時よくこういう仕草をしているが、匂いをつけてマーキングでもしているのだろうか。
「……流石にこんな道端で甘えるのはやめとけ」
「……いいじゃないですか。別に誰もいませんし」
「今はいないが、誰か通りがかるかもしれないだろ。　……また明日な」
「……はぁい」

俺の説得に一色が不満そうにしながらも了承する。
そして、名残惜しそうにしつつ身体を俺から離す一色。
俺もまた、離れていく体温を少しだけ惜しいと感じて、そんな自分自身に驚いた。
「……わたし、せんぱいの彼女になったんですよね？」
「……そうだな」
一色が上目遣いで楽しそうに聞くと、少しだけ照れつつ俺も肯定を返した。
「えへへ、じゃあ明日からは今までよりももっーと甘えられますね」
「……何にしても明日な。これ以上帰りが遅くなると困るだろうし」
今までですら相当甘えてきてたはずだが、それ以上とか想像すらできないんだが。
……まぁ、その辺は明日の俺に丸投げするとするか。
「うー、せんぱい、また明日ですよ？」
再び上機嫌さを取り戻した一色が、別れる段階になって寂しそうに別れを告げる。
不満と寂しさが入り混じった表情は、俺ともっと一緒にいたいという想いを如実に表現していて、少々照れくさい。
「あぁ、また明日な」
俺もまた、一色へと別れの言葉を返す。
それでようやく一色は歩き出すと、チラチラとこちらを何度も振り返りながら、後ろ髪をひかれているのが丸分かりの様子で去っていく。
名残惜しいのだろう。彼女の歩く速度はかなりゆっくりとしたものであり、これではいつになったらお互いが見えなくなるかわかったものではない。
幾らお別れが寂しくても、一色の帰りが遅くなるのは心配だ。
俺はそう考えて思わず苦笑すると、一色へと大きく手を振り、自転車へと跨る。
そうして、こちらへぶんぶんと手を振り返す一色を尻目に、自転車をこいで走り去るのだった。

＊＊＊

翌日。

「せんぱいぃー……もっとぎゅぅーってしてください」

「はいはい、わかったよ。……これくらいでいいか？」

二人っきりの生徒会室で、一色が座っている俺に正面から抱きついていた。

……これって対面座……いや、なんでもない。

「……もっとぉ」

「いや、流石にこれ以上は痛いだろ？」

「ちょっといたいくらいのが……いちばん、きもちいいです」

おぼつかない口調でそう言って、とろんとした目でこちらを見遣る一色を、彼女が望むままに強く抱き返す。

結構強く抱きしめているので少し痛いはずだが、当の一色はご満悦そうに熱い吐息を漏らすのみだ。

……一色の女の子らしい至るところが柔らかい身体が俺へと密着していて少々辛い。

少し熱いくらいの体温も、それを助長していた。

「はふぅ……しあわせ」

それを知ってか知らずしてか、一色は陶然とした様子で小さく呟く。

……こんな姿を見せてはいるが、生徒会長としてはかなり有能なんだよな。

普段よりも一段と手早く仕事を終わらせた今日の一色の様子を思い出して、苦笑する。

昨日帰り道でお預けした分、少しでも早く俺に甘えたかったのだろう一色は、生徒会メンバー（＋俺）に適切に仕事を振り分けると、仕事が終わるや否や生徒会を解散。

そのまま他のメンバーを追い出して、俺と一色だけが二人っきりで生徒会室に居残るという状況を作り出した。

……よく考えなくても有能さの使い方が間違っている気がする。
そんなことをつらつらと考えつつ一色をあやしていると、ふと彼女の様子から陶然としたものが薄くなって、その瞳に理性が戻った。
「んー、ねぇ、せんぱい」
「おう、どうした？」
「よく考えたら今の状況って、せんぱいと付き合う前とそんなに変わらなくないですか？」
一色の言葉に僅かに考え込む。
確かにそうかもしれない。付き合う前から一色はこれくらい甘えてきていたのだし。
「そうだな。というか、それはお前が付き合う前から手加減なしで甘えてきたのが原因なんだが」
「むー、それはそうかもしれませんけどー。せっかく恋人になったんですから、何か真新しいことをしたいじゃないですか」
「そういうものか？」
「そういうものです！　……なので」
突然一色は言葉を切って、俺の顔を覗きこむ。
そしてどこか小悪魔じみた悪戯っぽい笑みを浮かべて……。
「えいっ！」
目を瞑った一色の顔がいきなり近づく。
そして、覚悟を決める間もなく、驚きの声を発しようとした俺の口を一色の唇が塞いだ。
少しの間、生徒会室にゆっくりとした時間が流れる。
何も動くことなく、誰も話すことのない、静かで深い時間が。
そんな中で、混乱したままの俺は目を瞑ることもなく、ただ固まっていた。
一色がゆっくりと零となっていたお互いの距離を離す。
〝はふぅ〟と満足げに吐息を漏らした一色は、心底嬉しそうに微笑んでいた。
「……えへへ、大好きです、せんぱい」
いつもどういう意図なのか悩んでいた告白の言葉。

しかし、今度は俺も誤解することなく、突然の接吻への呆れを滲ませつつ返した。
「……はいはい、俺も好きだよ」
「……!? せんぱい、今のもう一回言ってください！　もう一回……いえ、やっぱりもう三回くらい！」
同じように言葉が返ってきたのがよっぽど意外だったらしい一色が騒ぎ立てる。
流石にもう一度同じことを言うのは気恥ずかしい。先ほどは雰囲気があったから言えただけだ。
なので、答えはもちろんノー。
「お願いします、せんぱい！　何ならおっぱい揉んでもいいですから！」
「……いや待て、流石にその交換条件はおかしい！」
俺と一色の間で、押し問答が繰り広げられ、言葉の応酬が起きる。
それでも、二人の間の空気は、和やかで楽しげだった。
「でーすーかーらー、せんぱい！」
つまるところ、べたべたと俺にくっつくことだけでなく、こうして騒ぎ立てるのも一色なりの俺への甘え方なのだろう。
一色にガクガクと身体を揺さぶられつつ、彼女の顔を見遣る。
適当にあしらわれているはずなのに、無邪気にはしゃぐ彼女は、妙に嬉しそうだった。
きっとこれからも、俺はこうして一色に甘えられるのだろう。
そう思って、俺もまた思わず笑みが零れるのだった。